

# 油彩のつながり

小林 薫子

その日その場所を、葵は偶然通りかかった。いつもは教室を出るとまっすぐに帰宅する葵だったが、その日は違った。古典の授業で分からないところがあり、先生に質問しようと思った後残っていたのだ。けど職員室に行っても古典の先生の姿はなく、葵は先生を探しに学校内を歩き回っていた。ちやうど、その時だった。

先生がいそうなどころは全て探し、それでも見つからなくて、こうなったら片っ端から調べようと、まずは校舎の三階、一番はじにある移動教室を覗き込んだ時——風が吹いたように感じた。

葵はその場で立ち止まり、息をすることも忘れ、ただそこを見つめた。ひとりの男子生徒が座っている、その向こう。夕暮れの金色に染まる中、そこだけが唯一染まらずにあった。

それは、森の絵。  
キャンバスに描かれていたのは、登山道のようなところ。でこぼことした道の幅が少し広がっていて、その左右には生い茂る木と根元の方には小さな祠が描かれている。

とどこどころ絵の具が掠れたり、キャンバスの白地の部分が残っていたりする未完の絵。けれど、一瞬、そのすべてを体感したように思った。……いや、確かに感じた。

土のにおいを、木々のざわめく音を、木漏れ日の温かさを、空の青のすがすがしさを、そのすべての感覚が押し寄せてきた。

押し寄せてきて、飲み込まれ、動けなくなった。

信じられないような心持で、ただそこを見つめていた。何秒、何分、何時間——。時間の感覚も忘れるほど。

どれくらいいたっていたのだろう——不意に、彼が振り向いた。

黒目がちな瞳。薄めの唇。見たことのない顔だった。

本当は立ち去ろうと思った。通りすがったようなふりをして、さっさと逃げたい。ただそれだけだった。

それなのに、彼が微笑んでいたから。驚いているのでもなく、不思議そうに見るのでもなく、ただ軽く笑っていたから——タイミングを逃して、結局ドアを開けて入った。

むわっとした、慣れない油絵の具独特のにおいが鼻につく。

「あの」

葵は思わず声をかけていた。

「その絵、いつ完成するの？」

「……うーん、いつだろうね？」

彼は困ったように笑った。目の前にある絵へと目を向け、首をかしげる。「一応文化祭前には終わらせようと思ってるんだけど……、時間の都合上、なかなかね」

「……そう」

落胆の色が声に出る。窺うように彼が目を細めた。

「きみは美術部員……じゃないよね。美術選択者かな？」

その言葉に葵は首を振った。

部活は書道部に所属しており、芸術選択でも書道を選択している。美術室になんの縁もない葵は、文化祭くらいしか生徒の描いた絵を見る機会がない。彼が二ヶ月後の文化祭までにその絵を仕上げてくれなかったら、葵が完成した絵を見れる機会がぐんと減るのは明らかだった。

それは彼にも伝わったらしい。

「……部活中に失礼しました」

と、部外者である葵が出ていこうとする中、

「月、火、金」

穏やかな声でそう言った。

「え？」

後ろ手にドアを閉めようとしていた葵は、手を止め振り返る。彼は赤子をあやすような顔をして言った。

「月曜と火曜と金曜に、ここで絵を描いてるから、見たかったらまた来る  
といいよ」

「……別に、見たいだなんて」

ぼつりとつぶやくけれど、彼は聞こえなかったのか手をひらりと振り、そのまま絵と向き合い筆を動かし始めた。

葵は彼と彼の絵を邪魔しないよう、ゆっくりとドアを閉め、静かにそこから立ち退いた。

正直言うと落ち着かなかった。今まで、こんなにも他のものが気になったことはなかったから。

次の日の火曜日、葵は授業中や休み時間に何度も時計を確認していた。そんな姿を見て、たまらず真子が声をかけた。

「葵、どうしたの？ そんなに時間を気にして。放課後何かあるの？」

肩の上で切りそろえられた黒髪を揺らし、ひょっこりと葵を覗き込む。

「……え？ ああ」

あわてて視線を戻し、口角を上げて見せた。

「別に、何でもないわ」

「そう？ 何でもないようには見えないけど。葵っていつも無表情でいように思えて、案外分かりやすいんだから」

心配そうな瞳で、じっと見つめられている。分かりやすい、って言葉に少しどきつとした。別に、秘密にしたいわけじゃないけど……。

「本当に、何でもないわよ」

わざわざ念押しする葵に、真子は、はいはいと苦笑をもらした。

「そうだね。葵の大好きな書道部は今日じゃないもんね」

いわれて、頬に手をあてる。

書道は好きだ。小学生のころからずっとやっている趣味で、もはや娯楽のようなものだった。なのに、どうして、今「書道」？ 放課後に待っているのは書道とは——葵の趣味とは程遠いものなのに。

もしかして、そんな顔をしていたんだろうか。楽しみで楽しみで仕方がないって顔。書道の時と同じ——いや、違う。

書道の時は、自分の書は気にしても他人の書は気にならなかった。それは自分には関係がないから。関係のないものを気にしたってしょうがない。自分のためにはならないと思っていた。

なのに、たった一瞬だけ見た、それも同じ学校の生徒が描いた油絵がこんなにも忘れられないなんて。

「……」  
だからその放課後、釈然しやくぜんとしないまま、それでもついで移動教室の前に立っていた。

昨日のように、まずはドアの窓から中の様子をうかがう。

見ると、既に彼はいた。机を下げてがらんとした教室の真ん中にひとりで座り、こちらに背を向けながら、イーゼルに立てかけた森の絵を描いている。

左手に持ったパレットは、緑、黄緑、茶色、黒と色が入り乱れていて、筆がそこを通るたびに、また新たな色が生まれていく。

思わず引き込まれるように身を乗り出して——彼と、目があった。

いつの間にか彼は手を止め、昨日と同じように軽く微笑んでいた。その穏やかな笑顔に、自分が窓にびったりと顔をくっつけるようにして見えたことに気付かされ、かあつと頬が熱くなる。

ガラスの向こうで彼が口を開く。

「……」  
ドアに遮断されているせいで音は聞こえない。けれど、今の言葉は読唇術を習っていないなくても分かった。

「……」  
全て見透かされた感じがして気にくわない——のに、ドアを開けてしま  
うのは、やっぱりあの絵が気になるから？

「……随分と早くからいるのね」

「授業がさっさと終わったからね」

彼は葵が近くまで来るのを待ち、それから下げられた机の方を指さした。「椅子持ってきたら？ 立ったままだと疲れるでしょ」

「……」

椅子を一つ持ってくる。そっと彼の隣りに並べて座った。

彼はそれを見届けると、パレットの上に出した絵の具をならし、少しずつ絵の上に重ねていった。

近くで見て、初めて分かる。キャンバスの表面は思っていた以上に盛り上がっていた。

薄く塗られたところ、厚く塗られたところ、平たいものを使ったかのように均一なところ、荒れた海のように波立っているところ。色だけではない。ほんの少しの筆づかいがこの絵に風を吹かし、木々をざわめかせ、光を与えている。

色を変え、筆を替え、時にはペインティングナイフを使いながらなめらかに動く腕。

「そういうのって、何か決まりがあるの？」

「え？」

腕は動かしのまま、彼がこたえる。

「だから、そういう凹凸をつけるとかナイフを使うとかって、こういう時に使いなさい、って決められているのかなって」

「いや、ない……と思う」

緑に黄色を混ぜ、出来た色をすくって丁寧に置いていく。そうやって一枚の木の葉ができあがる。

「なんていうか……直感？ 何枚も何枚も描くうちに、なんとなく分ってくるものみたいな……」

「ふうん」

「油絵って筆づかいとか大切だからね。何回も何回も塗り重ねることによって、深みが出てくる。筆の使い方を変えるだけで、ぐんと質感が出てくる」

「……」

意識して見てみる。つづいたようにでこぼこした部分と、流れるようになめらかな部分。近くで見たらそれはただの筆跡だけど、遠ざかってみれば葉と幹。緑色だけだと思っていた中にも、白や黒や、青がある。

葵はそれから話しかけず、下校の音楽が鳴り響くまで絵が完成へと近づく様を見つめていた。

金曜日。ホームルームが終わり、すぐにそこへ向かうと、彼はとつくと座って絵を進めていた。少しためらってからゆっくりと息をつき、ノックしてはいる。

「……こんにちは」

「こんにちは。部活は平気？」

「書道部。活動は水曜日と土曜日だから問題ないわ」

「書道……」

彼が目を見開く。葵にとつてはもう見慣れた反応だった。

前のように、端へ寄せられた机の中から適当に一つ椅子を選ぶ。

「わたしが書道をしたら、悪い？」

「いや、そういうわけじゃ……」

困ったように笑う彼を、ふんつと鼻で一蹴する。彼が言わんとしていることは分っていた。

葵は母がアメリカ人、父が日本人のハーフだ。そのせいで肌は人よりも白く、髪は銀灰色で、おまけに目は青い。どこをどう取っても日本人に見られることはない。

人ほたいといさういう者に対して、英語が話せるだとか外国に精通しているだとか、勝手なイメージを持つものだ。だから皆、葵が日本文化が好きだと言うと一様に驚く。でもさすがにそこは十七年の積み重ね。言われることにはもうだいぶ慣れて、半分あきらめてもいる。

「悪かったわね、外見と合わなくて」

「ああ、違う違う」

彼が苦笑いする。

「予想が当たったから驚いてただけだよ」

「え？」

「いや、予想って言うほど大げさなものでもないんだけどね。ただ、昨日の絵を見てる時のきみの姿勢が、すごく良かったから」

「姿勢？」

「そう」

椅子を持ち、彼のとなりにならぶ。

「背中に板でも入れているみたいに背筋を伸ばして、真剣に、静かに見えて。それを見たときに、この子は書道でもやってたのかな、って思ったんだけど」

「……」

黙って、隣に椅子をおろした。

「私、こんな外見してるのに、よく書道なんて思いついたわね」

「そんなの関係ないよ。外見選んで生れてくる人間なんていないさ」

「……それは、そうだけど」

彼のとなりに座り、その横顔を見つめる。静かな目。軽く結ばれた唇。形の良い耳。整った顔立ちだと思った。

「ふしぎな人ね」

「ふしぎ？」

「そう、ふしぎ。今までに会ったことのないタイプ」

「それは……光栄なのかな」

「さあ、どうなのかしら」

葵の言葉に彼が眉を寄せた。その困った顔がなんだか頼りなくて、情けなくて、思わずくすりと笑いが漏れた。それにつられて彼も笑う。何故だかわからないけれど、腹の底からおかしさがこみあげてきて、二人はしばらく、押し殺しながら笑い合っていた。

「……あのね、わたしが背を伸ばして真剣に絵を見てた理由、あれは書道部だからじゃないのよ」

笑いの発作がおさまり、その余韻である穏やかな空気に包まれた頃、葵が言った。

「ただ……すごく、気になってたから」

「気になる？ この絵が？」

「そう」

彼はしげしげと自分の絵を見つめた。彼が描いてきた、森に光が溢れる温かな絵。

「油絵とか興味ないから、どうしてかは分からないけど……」

「ふーん」

静かな目がこちらを向く。赤子に向けるような、深くて静かで優しい目。

「それじゃあ、もし分ったら教えてもらおうかな」

「そうね」

びん、と背筋を伸ばす。それをおかしそうに笑い、彼は筆を絵の具に付けた。

それから葵は毎回欠かさず、放課後になると彼のもとを訪ねた。

葵だつて決して暇なわけではない。中間試験もあるし、文化祭に向けてクラス企画の準備もある。

けれど、そんなことも気にならないほど二人で過ごす移動教室での時間は楽しかった。

弾けるような楽しさではないけれど、時間を過ごすということを楽しめるような、ゆるやかな楽しさがそこにはある。

気付けば、早く放課後がくることを望んでいた。早くあの教室へ行って、彼と会って、絵を見たい、と。

実を言うと、彼の名前もクラスも知らない。葵自身人づきあいが苦手なことに加え、学年でクラスが七つもある。その中で彼を探すのは大変だし、かといって今さら名前を聞くのもきまり悪い。

だけどそれ以上に、名前を知らなくても、クラスが分らなくても、そこに行けば彼がいて、絵を描いていてくれる——それだけで十分だった。

「ねえ。いつから油絵を描き始めたの？」

放課後二人でいるのがすっかり習慣と化したころ、葵は前から気になっていたことを聞いた。

チューブからビリジャンの色を出し、彼がこたえる。

「えっと……小学二年生くらいかな」

「そんなに昔から……」

驚く葵に、にっこりと彼が言った。

「親が絵画教室に入れてくれたんだ。週一回、土曜日だけだったけど」

「楽しかった？」

「そりゃあね」

彼がうなずく。

「いいよ、絵は。描いてると落ち着くし、嫌なことも忘れさせてくれる。完成した時のあの感慨もいいよね。……でもやっぱり一番は、自分の世界を表せることかな」

「自分の世界……」

葵が小さく呟いた。

「そう、世界」

絵の具を溶き、筆をすべらせる。

「何もない無地のキャンバスの上を好きな色で埋めていく。現実ではありえないようなものも何でも描ける。——どんな絵になるかは自分次第の、無限の可能性を持った世界」

「淡々と語るその言葉には、確かな重みがあった。世界、とその言葉を反芻する。」

「いいわね、そういうの」

「書道の方はどうなの？」

「ん……」

まさかこっちに質問がくると思わなかった。しばらく思考を巡らせる。

書道のいいところと聞かれればたくさんある。墨をする時の香りや、掠れがうまうまできた時の喜び。でも、油絵が世界を作ることだとしたら、書道は——。

「書道は世界っていうよりも、美しさかしら。真っ白な白紙の中にある黒。」

はつきりと分かる、白と黒とのコントラスト」

「コントラスト、か」

「まあそんなこと、普段はあんまり気にしないで書いてるけど」

「あはは。きみって、けっこう毒舌だよね」

「ほんとのことを言ってるだけよ」

失礼しちゃう、と呟く。彼がその言葉にくすくすと笑た。それに少しむつとする。

「……あのね、私は相手に合わせるのが嫌いなだけなの。私が言ってるのは辛辣な皮肉でも悪口でもないの、分ってる？」

「あー、言われてみればそうだね。えっとじゃあ、直截的？」

「……一応言っておくけど、これでも抑えてる方なのよ？」

膝に乗せた鞆に肘を置き、頬杖をつく。

「小学生のころ、友達にいろいろ言われてね。『本当のことだからって全部言っちゃうと、相手は傷つくんだよ』って、怒られた」

「へえ、いい子じゃない」

「そうね。……まあ、あの子がそこまで言うなら聞いてあげなきゃと思っ  
て。中高は言いたいことの四割ほどしかしゃべってないわ」

「……四割か。えーっと、もつと言いたいことがあるなら、別に言ってもいいんだよ？」

「んー」

しばらく逡巡する。窓から差し込む光を反射して、小さなほこりが舞  
っている。一つ、二つと目で追い、七つ目を追ったところで答える。

「あら？ 意外に無いかも」

唯一思いついたのは、彼の名前とクラスだけ。それ以外には浮かばな  
かった。

「へえ。それはすごい事かな？」

「そうねー。やっぱりあなたが変な人だから」

「……それは昇格なの？ それとも降格？」

「どうぞお好きなように」

「じゃあ、いい意味でとらえておくよ」

「そういい、ペインティングナイフを取り出す。

地面の部分にあたる茶色の絵の具にナイフをあてがい、ゴリゴリと削る。

「そこ、この前塗ったばかりのどこよね？ 削っちゃうの？」

「うん。ちよっと絵の具がはみ出ちゃって」

「ふうん……。なかなか終わらないのね」

葵が呟いた。葵が彼と会ってから、そろそろひと月が経つ。

さすがに塗り残しや掠れた部分はなくなっただけど、彼の絵は、塗られて  
塗られて、削られて削られて、となかなか完成する様子がない。

「もう十分、きれいだと思うけど」

「水彩とは違うからねー。色を重ねようと思ったなら、いくらでも重ねられるし。……まあでも、そろそろ終わる、かな？」

「えっ？」

彼の方に視線をうつす。思案顔で何か呟いていた。

「……うん。あとは光と、地面のこの影だけだから……」

「いつ？ いつ終わるの？」

「そうだねー。今日、明日、金曜日、その次——月曜日には、完成すると思うよ」

「ほんとにっ？」

声が弾んだ。思わず、彼の方に身を乗り出す。

「うん」

「そっか。月曜日か」

絵が完成する。ただそれだけのことが、こんなに待ち遠しい。

「ねえ、次は何描くの？」

「え？」

彼が驚いた顔をした。

「え、じゃないでしょ。次よ、次。もし良かったら、今度はちゃんと最初から最後までみたいなの、って」

「んー。……どうしよっか」

そう言って、彼は笑った。

葵はその笑顔にふと違和感を感じたが、口を開く前に彼が絵を描きだしてしまったので、黙っていることにした。

絵を見つめる、ふりをして彼の横顔をぬすみ見る。

彼はすっかり絵に集中していた。目を見ればわかる。静かにまっすぐ見つめる目。

そのまま時間は過ぎていった。教室が黄色から茜色へと変わる頃、穏やかな音楽が流れ、最終下校時刻を告げた。葵が立ち上がる。

「それじゃあ」

「うん」

彼がうなずく。ここに来た最初は葵も片づけを手伝おうとした。道具の片づけ方は分らないけれど、下げられた机を元に戻すことならできる。

だけど彼に、いいよ。自分でやったんだから、自分で片付ける、なんて言われてしまい、強く出ることもなんとなくはばかれたので、そのまま葵が先に帰ることが習慣化していたのだ。

鞆を持ち、ドアのところまで来て振り返る。

「じゃあ、また明日」

「うん、また明日」

彼がひらりと手を振った。

それから火曜日、金曜日と過ぎて、月曜日の放課後、いつもよりも足取りを軽くしながら移動教室へと向かった。

「こんにちは」

ドアを開ける。けどそこには、

「……あら？」

先に来ているはず彼も、絵も、そこにはなかった。

いつもは下げられている机も、今日はそのままの状態で放置されている。一瞬、間違った教室へ来てしまったのかと焦るが、そんなことはない。彼が絵を描いている教室は紛れもなくこの移動教室だった。

(ホームルームが遅れたのかしら)

人の気配も何もない、抜け殻のような教室に入る。やることなく、いつも彼が絵を広げていた場所の机の上に座る。

(……風邪で休み、とか)

遠くから楽器の音が聞こえてくる。窓からは、あたたかな夕日が差し込んでいた。かちこちと時を刻む、時計の秒針を見つめる。

(今日で、描き終わるって言ったのに)

二人の時は会話をしながら、ゆったりと時間を過ごせた。けど、一人ではそうはいかない。ただ沈黙がおりて、息がつまりそうになる。

(……早く来ないかな)

けれどその日、結局彼は来なかった。

次の日、最初にしていたように、そっとドアの窓から教室内を覗く。そこにはあのときのような人影はなくて、ただ無人の空間が広がっていた。

「……」

葵は踵を返した。向かったのは、一度も入ったことのない美術室。

意を決してドアを開けると、心地の良い油絵の具の香りがした。

絵の具で汚れた大きな机が六個。キャンバスやスケッチブックがそこら中に無造作に置かれている。

「あの……」

ざっと見たところ、中にいた部員は全部で十名ほど。みなイーゼルにたてた自分の絵に没頭しているためか、誰も顔を上げない。

それをいいことに、ひとりひとり見つめて確認する。見慣れた黒髪と、あの、なぜか気になる森の絵を。

(……いない)

ということとは、彼は風邪で休んでいるのか。そう思い、美術室をあとにしようとした時、信じられない物を見た。

「え……っ？」

美術室の奥、キャンバスが収納されている棚の上に、あの絵があった。見間違えようもない、この一カ月ずっと見てきた絵。踏み固められた土に、風に揺れる木々に、あふれる木漏れ日に、上からのぞく突き抜けるような青い空。その全てが詰まった、彼の世界。

(なん、で)

ただそこに置かれているのならまだ良かった。彼は描きかけの絵をそこに保管しておいたんだと思えた。

けれど、あの絵が気になって、ずっと見てきた葵には分かる。

あれは保管されているのではない、展示されているのだ。そう、描きかけなんかじゃない、あれは完成品――。

「ちよつと失礼」

「ひゃっ」

後ろから声をかけられ、葵は飛び退いた。そこに立っていたのは六十代近くであろう、白髪交じりの女性の先生だった。

「あらあなた、入部希望者？」

メガネの奥の目が細められる。慌てて首を振った。

「いつ、いいえ……」

「そう、さんねんね」

美術室へ入ろうとするその背中を呼び止める。

「ちよつと、いいですか？」

「え？」

先生が振り返る。奥に展示されたあの絵を指さす。

「えつと……あそこにある、あの森の絵を描いた人は、今どこに……」

「ああ、片岡くん？」

カタオカ……それが、彼の名前。

「そうです、片岡くん。彼は今日、来てますか？」

「いや、片岡くんなら辞めたけど」

「――やめた？ ……それって、部活を……？」

声が震えた。事もなげに先生が言う。

「ええ、つい昨日退部届をもらったわ。そろそろ辞めてもらわないとこっちも困ってたし……それにしても、彼は最後にいい絵を仕上げたわよね。そう思わない？」

「……そうですね……」

ありがとうございます。そう呟き、葵は美術室に背を向けた。

教室へ戻る。ガラリと戸を開けると、文化祭の準備のために十数人程度が床で作業をしていた。その中の一人、真子が顔を上げる。

「あれ、葵、どうしたの？ 今日は何事があったんじゃない？」

「え？」

真子が首をかしげる。その横へさつさと座り込み、かばんから筆箱を取り出した。

「で、私は何をすればいいのかしら？ 看板の下書き？ 模造紙の切り取り？」

「あ、えつと……模造紙」

「わかった」

右頬に、真子の視線を感じる。問いかけの視線。前に真子から、分かりやすいと指摘されたことがある。今も、そんなに分かりやすい顔をしてるんだらうか。

「……ねえ、真子」

「なに？」

「真子って芸術選択、美術を選んでたわよね？」

「そうだけど」

息を吸い込む。何でもない風を装って、聞いた。

「もし、絵を描いているときに隣に誰かいたら……迷惑かしら？」

「そんなことないと思うよ」

ふわりとした声色。

「私はいつもみんなとしゃべりながら描いてるよ。……まあそういうことって、人によっていろんな意見があると思うし、気になることがあるなら、直接本人に聞いたほうがいいと思うけど」

「……そうね」

黙って、模造紙をたぐりよせる。ハサミを入れようとしたとき、教室の反対側で、刷毛を手に持った男子が、ちよつと、と声を上げた。

「もし放課後残って作業すんならさー、あそこの延長届けの自分の名前のところに、丸をつけといてくんない？」

その男子が黒板のほうを指差す。そこには、学年全員の名前が印刷された紙がおざなりに貼りつけてあった。

トクンと心臓がはねる。

「わかった」

ペンを持ち、立ち上がる。その学年名簿を手にとった。名前に丸をつけるから、ざつと名簿を見わたす。

彼の名前はさつき分かった。片岡くん。真子が言っていたように、彼に

聞きたい。もし、自分の存在が彼の絵を邪魔してたなら、謝りたい。

「片岡、片岡……」

名前を一つ一つ指でおって確認する。けど……

「あれ？」

『片岡』の文字がどこにも見当たらない。

胸に手を当て、先生の言葉をゆっくり思い出す。——確かに、片岡と言っていた。それは間違いない。

なのに、学年名簿には名前が載っていないかった。これはどういうことか。考えなくても、答えは一つしかなかった。

「……同じ学年じゃない……？」

思い返してみれば、どこの学年にも属さない移動教室で会った関係。同年であるという確証はどこにもない。

(三年生か一年生のどちらかか……。いや、三年生はもう受験だし、ってことは一年生……?)

そこまで考えて、あきらめた。次の絵のことを聞いた時の彼の顔が思い浮かぶ。

同い年だと思っていた前提が崩れ、更には部活もやめてしまった彼に対し、どう話したらいいのか分らないから。——いや、話しかけても前と同じように受け答えしてくれるのか不安だったから、葵はそれ以上追及するのをやめた。

大丈夫、彼はいなくなっても、あの絵は美術室にあるんだから。そう自分自身にいい聞かせた。

それからというものの、彼とは全く出会うことはなかった。時々、ふらりとあの移動教室に立ち寄ったこともあったが、彼を見かけることは一度もなかった。

文化祭の美術部の作品展示では、彼の絵は奥の壁の真ん中、一番高い位置に飾られていた。それも、金属でできたフレームまでつけて。

少し、信じられない。こんな風に、誰にも触られないように飾られている絵をあんなに近くで見ているなんて。

信じられないけど……もちろん、夢なんかじゃない。

二人で共有した時間の全てを覚えている。茜色の夕日も、彼の穏やかな声も、絵を見つめるときの高揚感も。

だけどそれは、葵の独りよがりかもしれない。

葵は彼と、彼の絵の世界に無作法に立ち入ってしまった。見えない線で引かれているレッドゾーンに、足を踏み入れてしまった。

そんな自分を疎ましく思ったから、もう来なくなったのかも……。

彼から聞いたわけじゃないから、ただの憶測でしかないけれど。

葵が彼と会うきっかけを得たのは、それから更に後——卒業式のことだった。

毎年、高校三年生の卒業式には、在校生として高校二年生も参加する。葵の学年も例外なく出席していた。

とはいっても、実際、知っている先輩は部活や委員会と一緒にあった十数人。多くても三十人ほどだし、少ない人はほんの数人程度しかない。

対して、卒業する学年全体の数は一組から七組まで、約二百人ほど。

二百分の十数人。最初こそ、先輩をちゃんと見送ろうと思っけていても、結局はその数の多さに耐えかねて、寝てしまう人が大半だ。

葵も例外ではない。二百人分の卒業証書の授与を見るのは本当に退屈で、先輩ごめんなさい、と心の中で呟くも、意識はほとんど飛んでいた。

きつとこのまま寝てしまつて、次に起きるのは在校生の式辞の時だろうな——なんて考えてたりしたが、その予想は外れ、すぐに起きることとなる。

葵の半ば飛びかけている意識を戻したのは、三年二組の担任の先生の言葉。

「片岡 修治」

カタオカという言葉に葵は目を開けた。眠りの穴へと落ちていた意識を引き戻される。

壇上で歩いていたのは、黒い髪をした男子生徒。

その生徒が背を向け、卒業証書を受け取り、再びこちらへ向いた時、葵は思わず声を出しそうになった。

遠目からでも分かる。一か月も一緒にいたんだから、間違つたりしない。カタオカは、彼の片岡だった。

年上だったことには驚いた。だれどその一方で、そのことを昔から知っていたようね——そんな何とも言えない気持ちになる。

壇上から降りてくる彼を目で追う。少し緊張気味の顔。その視線が左右にキョロキョロと動いて、葵とぶつかった。

瞬間、彼の表情が和らぐ。ほっとしたような笑顔だった。

式が終わつた後、葵はあの移動教室で待つていた。

約束はない。けれど予感があった。

今日、彼がここに来る……そんな根拠のない予感が。

そしてその予感通り、彼は現れた。

「……三年生だったのね」

先に口を開いたのは葵だった。入って来た彼の身長は葵のものよりも頭一個分はゆうに高い。ずっと座って話していたせいで、彼のこの身長にも気付かなかった。

ためらいがちに、彼が近づく。

「……きみが同じ年だと勘違いしてるのはすぐに分ったんだけど……なかなか言う機会がなくて」

葵と同じように、隣の机に腰掛ける。彼の手には、文具店の大きなビニール袋が握られていた。外見からわかるのは、卒業証書とおおきなキャンバス。見なくてもそれがなんの絵か、直感的に分かった。

「別に……勝手に勘違いしたのは、私の方よ」

「まあ、そうだけど」

あはは、と照れたように笑う。前と変わらない彼の態度に葵はほっとした。

「絵はいつ完成したの？」

「月曜日だよ」

彼がこたえる。

「……うそよ」

葵が言った。

「私、ちゃんとしたもの。月曜日にこの場所へ」

「うん。だから、きみが来る前に終わらせたんだ」

「来る前——って、私だってホームルーム終わってからすぐに来たのよ？ そんなに早く描き終わったの？」

「——ああ、そっか。これも言ってなかったね。高三になると選択授業でさ。月、火、金の授業は四限までしかなかったんだ」

「……なるほど」

葵がどんなに早く移動教室に行っても、彼はいつもキャンバスを広げて、絵を描いていた。不思議には思っていたけど……そうか、そういうことか。

「待っててくれてもよかったのに。そのせいで、この四ヶ月間悶々と悩んでいたんだから」

「ごめんごめん。本当は、ずっと前から、この絵を終えたら受験まで描くのは止めようって決めてたんだけどね。でも、それを伝えるにはおれは高三です、って言わなきゃいけないでしょ？ それはなんだかちよつと、今さら過ぎて気恥ずかしいっていうか……」

「……私の存在が邪魔だから、出てかれたのかと思ったわ」

「え、何で？」

彼が素つ頓狂な声を出す。そのまぬけぶりに思わず力が抜けた。「何でって、絵に集中できなかつたりとか、私と喋るのがおつくうだったりとか……」

「自分から誘っておいでそんなこと思わないよ」

葵の言葉をさえぎって、思いのほか強い口調で彼が言った。

「むしろ逆っていうか……、今までの中で一番うまく出来たし」

——最後にいい絵を仕上げたわよね。

美術室で会った、先生の言葉が浮かぶ。

「だから、ありがとう」

彼が穏やかに笑う。葵はすつと目を逸らした。

「私は、何もしてないけど……」

「だから、そんなことないって」

「……」

沈黙がおりる。いつもの放課後の、あの静かな時間ときとは違う。葵はそれに焦りを感じていた。違ってしまう、遠くなってしまう。彼も、あの絵も、もう見えない離れたところに行ってしまう。

「……ごめんね」

「へっ？」

どきんと胸がはねる。心の中を見透かされたのかと思ひ、葵は慌てた。

「なっ……何？」

「んー」

手に持ったビニール袋を揺らした。

「今まで色々偉そうに話してたけど、……あれ、本当かどうか分らないんだ」

「え？」

予想外の言葉に、今度は葵が間の抜けた声を出す番だった。

「ペインティングナイフの使い方とか、筆の使い方とか、色々聞いてたよね。でも、あの時答えたのはおれの体験談。おれが知らないだけで、もしかしたらちゃんと決まった使い方があったのかもしれない、ってこと。」

絵画教室は、高校受験のために、中三の最初に辞めちゃってたし……技法だとか、そんな専門的なことはあんまり知らないんだ」

葵は静かに彼の言葉に耳を傾けた。

「でも、絵とかはすごい好きだから、大学も美大とか行きたいなー、って思ってた。けど私立はすごくお金かかるし、国立は競争率がものすごく高いし、おまけに試験科目にはデッサンだとか、画塾に行っていないとできないようなものもあって……」

気付いたときは遅かった。もう、趣味としてじゃなくって、本格的に絵を学ぶのは無理なのかな、なんて思ってたんだ。けど、」

彼はそこで言葉を切った。手を止め、葵へと目を向ける。

「そんな時に、きみが来た」

「……」

「驚いたよ。きみは色々目立つからさ、一応名前だけは知ってたんだけど……それでも一度も話したことのない後輩が、いつ完成するの、なんて聞いてきて。うん、あれは本当に驚いた」

「別に、いいじゃない」

頬が熱い。今まで特に何とも思っていなかったけど、改めて聞くと大分突拍子のない事をしてたんだと分かった。

「うん、いいよ。」

進路のこととかさ、実は結構不安に思ってたんだよね。

おれは絵が好きで、自分なりに小中高と頑張って描いてきて、もちろんこれからはずっと描いていきたいけど、実際はどうなんだろう。他の人から見れば、おれの描いた絵なんて、全然、取るに足らないほどのものではないんじゃないか——ってずっと考えてた」

「……」

「でも、きみが来てくれたから。おれの絵を見て、こんな風に想ってくれている人がいるんだって分かって。……もう少し、頑張ってみようって思えた」  
彼が口を閉ざす。しん、とその場が静まった。

今の話に見合うだけの言葉が見つからない。葵はそのまま黙っていた。二人とも何も言わず、教室には時計の音だけが響いており——。

「あーもうっ」

彼がいきなり頭を抱えて叫んだ。

「だからこれ言うのいやだったんだよ！ 絶対微妙な空気になるってわかってたもん、おれ」

「ふふ」

笑みが漏れる。

「なに？」

「なんか、年上に見えない」

「失礼するなー。これでもちゃんと大学受かったんだよ。十月まで絵を描いていたのに、すごいと思わない？」

「そこって、美大？」

「ううん、普通の大学。でも絵はちゃんと続けるよ。画塾とか通ってみようかな、って思ってる」

「そっか」

彼が机から降りる。んー、と背伸びをして言った。

「はい、これでおれからの報告は終わり。……結構、時間たっちゃったね」

「……うん」

潮時だった。もうきつと、彼に会うことはない。ほんの少しだけ重なり合った人生の道筋は、今日からまたバラバラになる。

「あ、そうだ」

彼が思い出したように、ビニール袋の中を探り出す。

「どうしたの？ わすれもの？」

「ううん、そうじゃなくて……あつたあつた」

取り出したのは、縦の長さ15cmほど、横の長さはその三分の二くらいのもので——厚さから分かる、それはキャンバスだった。淡い黄色の包装に、赤いリボンが付けられている。

「今日会えなかつたら、先生に預けようと思ったんだけど……よかつた、会えて」

彼からそれを受け取る。微かに、絵の具の香りがした。

「これ、キャンバスよね？ 随分小さい……」

「さすがにあの絵はおれにとつても特別なものだからあげられない。じゃあどうしようかなー、って考えた結果、これになったんだ。……気にいってくれるといいけど」

「あけてもいい？」

「だめ」

「ケチ」

そつと、そのキャンバスを抱きしめる。やっぱり、油絵の具の匂いがした。懐かしい、いつもとおんなじ香り。

「ありがとう」

「うん」

彼が頷く。

「……それじゃあ、元気でね」

彼が歩きます。これで本当に終わりだ。彼も、あの絵も、教室から去っていく。

けれど葵の手元には新しい絵があった。まだ終わりじゃない。つながりはちゃんと残っている。

「待って！」

大切なことを思い出し、慌てて呼び止めた。彼が振り返る。

「私にも、言わなきゃいけないことがあるの」

いつかした、彼との約束。

「あなたの絵が気になってた理由。えっと、なんて言えばいいのかしら。一目ぼれ……共感？ あの時、あの絵はまだ未完成で、塗り残しもあつたけど、それでも一目見ただけで、何か……伝わって来たわ」

ひとつひとつ言葉を運び、気持ちに近いものを伝えようとする。

「共感したから、あの絵の完成を見てみたかった。それが、気になってい

た理由よ」

「そっか」

彼が微笑む。眼差しに温かさがにじんだ。

「じゃあね」

「うん」

彼にもあの絵にも、また会えるという保証はない。けれど彼は葵に一枚の絵をくれた。それが、つながりになる。

澄んだ気持ちで、葵は彼を見送った。

そのあとすぐに家へ帰った。あわただしく部屋へ直行する。ドアを閉めて誰にも見られないようにしてから、鞆から絵を取り出した。

手のひらよりも一回り大きいサイズのキャンバス。包装は彼が自分でしたのだろうけど、店のものと同じくらいきれいに出来ていた。きつちりとめられたセロハンテープを、丁寧にはがす。

包みを開くと、むわっと油絵の具の香りが広がりに出てくる。

緊張しながら包みを取る。キャンバスに描かれていたのは、「葵」の絵。

青空へ向かって、すくっと伸びた茎から、赤色や桃色の花が連なって生えている。

森の絵が温かな雰囲気を持つてるんだとしたら、この絵は嫌なことを洗い流してくれる、すがすがしさを持つ絵。

一瞬で心を奪われた——なんて、当たり前だ。

（タチアオイ……だっけ）

彼がこれを描いたのは、きつと、葵の名が「葵」だったからだろう。それくらいはわかる。伊達に二ヶ月近く一緒にいたわけじゃない。

葵はつい今日まで彼の名前を知らなかったのに、彼の方はきちんと下の名前まで覚えていてくれた。

揺れることも迷うこともなく、しつかりと上へ向かって伸びているそれに、絵は続けるよと、強く言い切った彼の姿が重なる。

（今度、額縁でも買ってこよう）

そうして部屋に、大切に大切に飾っておこう。

嫌なことがあった時にはこの絵を見て、心機一転できるように。

へこんだ時にはこの絵を見て、彼の描いたもう一枚の絵を思い出し、また頑張れるように。

寂しくなった時には、この絵を見て彼との時間を思い出し、温かくなれるように。

絵を抱いた葵には、きれいな微笑みが満ちていた。